

## フロイト・セミナー中級篇

### 第3回 メランコリーと同一視

重元寛人

フロイトは、『悲哀とメランコリー』(1917)の中で、精神障害としてのメランコリー(うつ病)について、正常者が愛する対象を失ったときに起こる「悲哀(喪)」と対比しながら論じている。

まず、**悲哀**について。

悲哀はきまって愛する者を失ったための反応であるか、あるいは祖国、自由、理想などのような、愛する者のかわりになった抽象物の喪失にたいする反応である。(『悲哀とメランコリー』フロイト著作集6巻より、以下も同様)

普通の人が、愛する者を失ったとき、どうするか。「愛する対象がもはや存在しないことが分かり、すべてのリビドーはその対象との結びつきから離れることを余儀なくされる」のである。

しかし、これはとてもつらいことだ。この状況に対しては「当然の反抗」が生じる。簡単にはあきらめきれない。

このつらい状態から回復するには、「時間と充当エネルギーをたくさん消費しながら」**悲哀(喪)の仕事**をなし遂げなくてはならないのである。この間、自我は外界に対する関心を失っており、依然として心の中に存在し続ける対象への追想に心を奪われているのである。

やがて、この対象からリビドーが少しずつ解放され、悲哀の仕事が完了した時、自我は、ふたたび外界の別の対象にリビドーを充当することができるようになる。

以上が悲哀の説明。

では、**メランコリー**はどうか。メランコリーの症状は、多くの点で悲哀の際に当事者がとる態度に似ている。

メランコリーの精神症状は、深刻な苦痛にみちた不機嫌、外界にたいする興味の放棄、愛する能力の喪失、あらゆる行動の制止と、自責や自嘲の形をとる自我感情の低下――妄想的に処罰を期待するほどになる――を特色としている。(『悲哀とメランコリー』)

上記の特徴のうち……

「深刻な苦痛にみちた不機嫌、外界にたいする興味の放棄、愛する能力の喪失、あらゆる行動の制止」は、悲哀とメランコリーに共通する特徴である。

また、「自責や自嘲の形をとる自我感情の低下」は、メランコリーにのみ見られる特徴であるという。(もっともこれが、悲哀の時にみられる場合もある様な気がするが……そういうのは病的な悲哀なんだろうか。)

このような両者の類似性と相違からの類推。

**メランコリーは、悲哀と同様、愛する対象の喪失にたいする反応である。**

しかし、メランコリーが成立する過程は、以下の点で悲哀と異なる。

- (1) 対象の喪失が現実的なものでなく、観念的な性質のものであり、また患者は対象について「何を失ったか」ということについて意識的には知らない。
- (2) 対象から解放されたリビドーは、自我に戻り、自我の中で、捨てた対象と自我とを同一視するためにつかわれる。(自己愛への退行)
- (3) 患者の対象への愛はもともとアンビヴァレントな性質をおびている(つまり憎しみを含んでいる)。このため、上記の過程(リビドーの自我への回帰)により、愛は憎しみに転化する。自我の中の対象に同一視された部分は、侮辱され、軽蔑され、苦しめられる。しかも、そのことは患者にサディズム的満足を与える(対象への復讐)。

3番目のものは、メランコリーにのみみられる特徴、「自責や自嘲の形をとる自我感情の低下」を説明している。

さて、このような過程を見て気づくことがある。それは、「メランコリーの患者では、自我の一部がほかの部分と対立し、それを批判的に評価し、いわば対象とみなしている」ということである。

この、「自我から分離された批判的な審判」は、ほかの状況でもその独立性をしめし、残りの自我からは区別されるのではないか、という推測がなりたつ。実は、この概念こそが、後に『自我とエス』(1923)において、超自我の概念へと発展するものである。

『悲哀とメランコリー』の時点(1917年)では、フロイトの後期の理論で登場する「死の欲動」や「超自我」の概念がまだ確立されていない。このために、この論文では、うつ

についての多くの謎が説明されないままになっている。

例えば、メランコリーが、「正反対の症状を持つ躁病の状態に転換する傾向のあること」に対しては、以下のような曖昧な説明しかなされない。

躁病はメランコリーとおなじ内容を持ち、同じ「コンプレクス」にとりくんでいる病気だが、メランコリーでは自我がこのコンプレクスに屈服しているとおもわれるが、躁病ではそれに打ち勝つか、またはそれをとりのぞいている、という印象である。

（『悲哀とメランコリー』）

これに対して、後期の論文『集団心理学と自我の分析』（1921）では、以下のように明確に論じている。

自我の分析にもとづいて疑いなくいえることは、マニー患者の場合には自我と自我理想が融合していること、その結果、当人はなんら自己批判によってきまたげられずに、勝利と自己満足の気分ひたって、抑制の顧慮や自己非難の停止を楽しめることである。メランコリーそしてまたその患者のみじめきは、自我の二つの存在の鋭い分裂の現れであって、過度に鋭敏な理想が微小妄想や自己卑下の形で自我にたいする判決を仮借なくあらわにする。

（『集団心理学と自我の分析』フロイト著作集6巻より）

この論文では、躁状態を原始人における「祭り」に例えている。つまり、祭りの時、原始人は「平生は神聖視されている禁令を犯して、ありとあらゆる放縦に終わる」のである。これと同じように、「理想の廃棄は自我にとって素晴らしいお祭りに違いないし、そのさい、自我はふたたび自己満足にふけることが許されるのである。」